

巻頭言

「国立競技場と Tokyo2020」

理事長 新谷友良

梅雨が明けた7月の午後、病院帰りに青山一丁目で地下鉄を降りて、外苑東通りを赤坂御所に沿って歩きました。地下鉄から地上に上がると、今年初めて蝉の声が聞こえて、両側の街路樹がみどり濃く夏空に映えていました。

人通りは少なく、数日後にオリンピックが開催される祝祭感はありません。それでも、国立競技場近くの権田原（明治記念館）の交差点には、警備用の車両が沢山駐車していて交通整理に当たっていました。車両ナンバーは山口、島根、広島と中国地方の警察がこの辺りの警備を担当しているようでした。

警察官に立ち混じって、ボランティアの人も出ています。その一人に、この交差点を左折して国立競技場まで行けるのかと聞くと、直進して信濃町の手前まで行き、そこから千駄ヶ谷駅の方に曲がると競技場が遠望できるとのことでした。競技場への道には、複雑な誘導柵が置かれており、横断歩道はすべて両側が高い柵でガードされて歩行禁止になっています。それでも、競技場と通りを隔てた公園まで行くと、道路越しに千駄ヶ谷門とスタンドの外側が見えて、警官と自衛官が入り口に立っていました。

2年前の冬、競技場のお披露目があり、中に入って車いすゾーンやヒアリンググループ席を確認して回りました。その時一つ一つ座席の色を変えているのが非常に印象的でしたが、あとで説明を聞くと観客と空席の区別が付き難く、満員のように見える効果がある、ということでした。多くの会場が無観客の開催となった今回のオリンピックを思うと、随分と皮肉なデザインとなったように思えます。

このあと、東京体育館の横を通って中央門まで歩きましたが、建設工事用のフェンスが延々と続いていて暑さも厳しく、仕方なく地下鉄の「国立競技場」まで戻りました。その日の乗降客は数えるほどでしたが、駅の清掃スタッフはエスカレーターの手すりを拭いて、別のスタッフは、「Tokyo2020」、「オリンピックスタジアム・東京体育館」という柱のポスターを丁寧に磨いていました。

相次いだ不祥事は別にして、コロナ感染の中で頑張った多くのアスリートと一緒に、炎天下動き回っていたボランティア、黙々と拭き掃除をしていた地下鉄スタッフなどさまざまな人を思い浮かべて、Tokyo2020 をできるだけ細かく、厚みのある形で記憶したいと思っています。